

## 回心した放蕩息子

## 大久保真次郎

本井康博

(同志社社史資料室)

羽がはえた子

「この子のからだにや羽の生えとるけん」

祖母が言う通り、大久保真次郎の生涯は流浪の一路であった。太平洋のかなたに墳墓の地を見いだすまで飛びに飛んだ(久布白落実『父と良人』二二二頁、東京市民教会、一九三六年)。

生誕地の肥後から終焉の地、西海岸にいたるまでの五十九年の歩みは、波瀾万

丈で無鉄砲そのものであった。「尻の据らぬといふ事が、彼の特色の一つ」と義弟の徳富蘇峰は漏らす(『蘇峰自伝』九九頁、中央公論社、一九三五年)。

蘆花伝を著した中野好夫は、この大久保を「型破りの痛快男子」と形容し、徳富蘇峰・蘆花の周辺で「もつとも食欲をそえられる人物」と断じる(『蘆花徳富健次郎』一、一六五頁、筑摩書房、一九七二年)。中野は記す(以下「」は本井)。「たいへんな俊才で、早く熊本医学校に学び、北里柴三郎、緒方正規などと共に選ばれて、東大医学部の前身医科大学に

学ぶが、まもなく肉体の医学に失望、学業を棄てて東本願寺のさる字僧「小栗憲一」の居候になる。だが、これも法城の腐敗を知ると、箒で仏像の頭をはり倒して飛び出し、同志社に入學した。

天成の煽動家だったらしく、ここでも下級生の猪一郎「蘇峰」等を煽って学校騒動を起させ、ついに猪一郎等の半途退学にまで導いた、蔭のその黒幕は大久保であったという。そして彼自身も新島に、『足下ノ奴隷タランヨリ寧ろ娼妓ヲ抱イテ眠ラン』などという文章を叩きつけて、また飛び出してしまふ。



1878年初めの同志社学生。「熊本バンド」に交じって家永(注)豊吉(No.1)、大久保真次郎(No.26)、徳富猪一郎(No.30)の顔が見える。なかでも「赤鬼」、大久保の面構えは精悍そのものである(同志社社史資料室所蔵)。

そのあと大阪で海運業をやったり、尾道で旅館業をやったりするが、すべて失敗。その前に妙な縁で「徳富兄弟の姉」音羽子と結婚していたわけだが、そんなわけで、三十三歳の老書生になってから

改めて新島に詫言を入れ、ふたたび同志社邦語神学部「別科」に入学していたのである。「蘆花の」「黒い眼」「茶色の目」によると、『赤鬼』という綽名だったという(同前、一六五〜一六六頁)。

要するに、大きき大将である。

同志社の「赤鬼」は以後も異名には不足しなかった。いわく「貞九郎」、「暴れ者」、「策士」、「陰謀家」、「横着者」、「野心家」、「組合教会の田中正造」、「上州鎮台」、「意地悪先生」、「大久保彦左衛門」、「粟」——(『父と良人』二二七頁)。

### 「自責の杖事件」の黒幕

ところで、中野の言う「学校騒動」とは、周知の新島襄「自責の杖事件」の原因となった学生ストのことである。蘆花たち二年生上級組が、「二年生下級組と合併」という当局の方針に反対してストに入っ

たさい、陰で指揮をとったのは五年生の蘇峰であった。が、その背後にはさらに黒幕がいた。すでに退学していた大久保であった。校外から盛んにけしかけた点を捉えてこの紛争を「大久保事件」と見る人さえいる。

実際、初期の同志社で新島校長や教師(宣教師)をも凌ぐ羽振りをきかせていたのは、熊本洋学校出身の「熊本バンド」の俊才たちであった。彼ら小崎弘道や海老名弾正、浮田和民らは熊本時代の恩師、L・L・ジェーンズを高く買う一方で、同志社のスタッフを軽視した。

同志社をわが物顔に引き回すこれら「熊本バンド」の先輩たちに反旗を翻そうとした学生グループがいた。熊本医学学校出身の大久保や、熊本洋学校で下級生であった蘇峰、家永豊吉(当時は辻姓)たちである。彼らは学内では「同心交社」という学生サークルの幹部でもあった。彼らはさしずめ「大久保党」とでもいへき存在で、首領の大久保は数歳年下の蘇峰と家永とを手足のように使って、親分風を吹かせた。同志社の教師たちには「赤鬼」はまさに目の上のタンコブであっ

た。

### 智徳論争と同心交社

同志社の開校当初、学内では「智が勝るか、徳が勝るか」という「智徳論争」がこの「同心交社」を舞台に燃え上がった。今風にいえば、信徒間の、あるいは教会内部での「社会派」対「福音派」の論争とでもいえようか。ともかく、一時は学内を二分するほどの勢いとなった。そのさい「大久保党」は「智論派」を代表し、「熊本バンド」が主流を占めた「徳論派」と対峙した。

実は例の「学校騒動」はこの論争が底流に潜んでいる。同志社を見限って「自責の杖事件」の前年にすでに中退していた大久保や家永たち、それに「自責の杖事件」後に同志社を去った蘇峰たちはいずれも「智論派」の面々であった。要するに彼らは論争に愛想を尽かし同志社を見限り、飛び出した。その筆頭が大久保なのである。

入学早々にいったんは新島から洗礼を受け、京都第二公会（同志社教会）で役員まで務めた大久保ではあるが、キリス

ト教に冷めるのも早かった。失望のあまり新島を「堪忍強き愚直一片の耶蘇坊主」と切り捨てた。新島宅での祈禱会で「暴論」を吐いた大久保を新島は別室に呼んで、懇々と説諭したこともあった。そしていよいよ退学決行というその日、新島は大久保を三条の旅館にわざわざ訪ね、最後の説得を試みた。赤鬼もやつきとなって抗弁したにちがいない。溝は埋まらなかった。ついに大久保は「私はあなたのために祈ることをやめません。信仰を失ってはいけませんよ」との師の言葉を聞き流すかのように東京へ向かい、実業界へ転じた（『新島襄全集』九上、二九三頁以下）。あるいは家永の中退も同時であったのか。

### 放浪、煩悶、そして改悛

かくして恩師に唾して同志社を去った大久保は以後、荒れた流浪と煩悶の生活を八年も送った。一度などは八方ふさがりの中で思い詰めたすえに妻子を殺害したうえドイツへ逃亡することさえ計画するまでにいたった。

したがって時に帰宅する父を迎える娘

の落実おちみ（後の日本基督教婦人矯風会会頭）も利口であった。大声で「落実！」と呼ばれると、「ハイイ」と答えて反対方向に走って行くのが常であった（久布白落実『魔娼ひとすし』二三頁、中公文庫、一九八一年）。

この大久保に劇的な改悛の時がきた。一八八七年正月、尾道でのことである。それまでの自堕落な生活からきつぱりと足を洗い、キリスト教信仰に立ち返った。愛用の盃を捨てて、一度は破棄した聖書を妻の音羽から借り受け、再読し始めた。音羽は大久保の放浪中、従兄弟の牧師、横井時雄（のちに同志社総長）の指導で信徒となっていた。夫の更生を祈る彼女の祈りは聞かれたのである。信仰を回復したばかりか、今度は牧師を目指す、と唐突に言い出すところがいかにも大久保らしい。

戻る所は新島しかなかった。彼はただちに新島に罪を告白して許され、聖書の「放蕩息子」さながらに同志社に戻った。時に三十二歳。さしずめ「社会人入学」である。

ちなみに家永も中退後に渡米し、かの

地で信仰を復活させていたのは奇遇である。そして新島を再評価し、新島伝を英文で作成する計画をたてた。一方、中退後の蘇峰が一貫して新島の支持者であったのは周知のことである。要するにかつて新島に背いた旧「大久保党」の幹部は中退後、そろって「新島党」に転じたわけである。

#### 新島夫妻と大久保一家

新島は大久保の再入学から自身が大磯で死去するまでの三年間、物心両面で大久保一家を支えた。一方、新島に対する



大久保真次郎と妻（音羽）、娘（落実）。  
1902年8月撮影（同志社社史資料室所蔵）。

父親の気持ちは子供にも通じたものと見え、「お母さん、家が火事になったら一番に聖書と新島先生のお写真を持って出ますね」が落実の口癖となった（『父と良人』五四頁）。

ちなみに、大久保一家が入浴し、挨拶のために新島の私邸を初めて訪問したときのことである。新島八重が団扇の形をした干菓子を落実に渡して、「これ団扇でしょ。お腹が風が起きますよ」と言ったら、新島がすぐさま側から「子供にもウソを言っではいけません」と生真面目に夫人をたしなめた。夫妻の性格の差がよく出ている

（『魔娼ひとすじ』三〇頁）。

また、新島は大久保から「落ち目の時に生まれたから落実とつけた」と聞かされたさい、「子供にそんなことをしてはいけません」と真顔で

注意した（同前、一六頁）。

ところで八年間、挫折と失意の生活を送った大久保の目には、新島の姿はかつての「堪忍強き愚直一片の耶蘇坊主」ではなく、真正正銘の「新島大先生」であった。あまりの不思議さに大久保が質すと、新島は「それはあなたの目の変化です」と答えた。そして「今日の日本で英雄、豪傑と呼ばれる人びとは、悉く肉食動物です。いや、多数は腐水の蛆です。彼らの事業は賽の河原の子供の石積みと変わらぬ、おまけに官爵や位階を喜ぶ点では猿と同じです」と続け、「真の事業は、キリストとともに十字架につけられた者でなければ成就しません」と大久保に忠言した（『父と良人』二二六三頁）。

#### 独立伝道に献身

同志社での学業を終えた大久保に新島は秩父伝道を勧めた。おりしも組合教会と一致教会との間で教会合同運動が進められた。新島は「自由・自治（独立）」を標榜して合同反対に回った。大久保は新島のサイドに立った。棄教していた蘇峰も新島を支持した（家永は留学中）。組合

教会では推進派は主として「熊本バンド」であったので、ここでも大久保や蘇峰（旧大久保覚！）はかつての「智徳論争」と同じ構図を再現してみせたわけである。

大久保は後年、「予は当時先生を助けし一人なり。機密に参せし一人なり」と回想する（『父と良人』二六五頁）。それだけに相手陣営からは「策士」との誹謗を蒙ったかもしれない。

大久保の秩父伝道が成果を出す前に新島は大磯で他界した。大久保の失望は尋常ではなかった。「益す信仰を固くし主の為ニ働かれんことを祈る。結果の出来る迄現今の地を去る勿れ」が、新島が大久保に残した遺言であった（『新島襄全集』四、四〇七頁）。蘇峰が見抜いた「尻の据らぬ」という傾向を新島もまた内心、危惧したのか。

にもかかわらず、結果的には大久保はその後、各地を転戦した。まず上州の藤岡（緑野教会）に転じ、ついで高崎教会に進んだあと、一九〇二年にはホルルに飛び、最後は西海岸にたどり着いた。ここでもオークランド教会で七年間、労苦したあと、北加基督伝道団を組織し

て巡回牧師となり、サンフランシスコを拠点に西海岸の日系移民の間を飛び回った。

彼は行く先々で新島の「自由・自治（独立）路線をがむしやらに突き進んだ。あらゆる困難を突き抜けて、つぎつぎと自給・独立教会を実現させた。彼はどこにあつても「独立伝道」、すなわち「なげなしの月給をまず寄付する」流儀で一貫した（『父と良人』三三三頁）。それは再生時に新島から直接に伝えられた「人心之改革なくして物質上之改革なんする者ぞ」（『新島襄全集』三、四六三頁）との師の気概に対する彼なりの応答（責任）であつたのであろう。

#### 父を語り継ぐ落実

大久保の生涯は、からだに羽がはえているかのごとく飛びに飛んで、ついにオークランドに永眠の安息地を確保した。ちなみに「父は飛行機、母は立ち白」と落実は言う。ただし、白のようにどっしりと落ち着く以前の母親は「熊本での最初の職業婦人」であり、少女時代に養蚕技術取得のために肥後から信州、上州へ

と派遣された（『父と良人』三七頁、一二三頁）。

落実はそうした両親、とくに父の生き方を受け継ぐかのように日本と世界の各地を飛び回った。かつて「足下ノ奴隷タランヨリ寧娼妓ヲ抱イテ眠ラン」との捨てぜりふを吐いて、新島のもとを去った父親。一方、その娼妓の解放のために日本基督教婦人矯風会の会頭として娼婦運動に献身した娘。不思議といえれば不思議な取り合わせである。

ある縁者は彼女を「ミスター落実と称する男まさりの女性」と評す（同前、四七六頁）。母親の音羽が「ミスター落実」の社会的活動を家庭で支える「主婦」役に徹したのである。落実は最後まで家庭におさまる女性ではなかった。いずれも牧師であつた父と夫（久布白直勝）との後を追うかのように八十三歳のおりに牧師試験を受けて伝道の前線に立った。

彼女は娼婦運動のかたわら、多くの著作を残した。その点は、日本救世軍の山室軍平を想起させる。彼女の最初の著書が『父』（一九二〇年）なのである。同書はのちに『父と良人』と拡充され、父親

ゆかりの同志社大学に自署と聖句——  
「忍耐生練達」——とを添えて寄贈され  
た。

かくして著作のない大久保の事績は娘  
によってかろうじて今に伝えられてい  
る。ほかには拙稿「新島襄と大久保真次  
郎」（『新島研究』七八、一九九一年）が  
あるばかりである。新島が愛好した「個  
儻不羈なる書生」の典型として今少し注  
目される価値は十分にある。

### 大久保真次郎略歴

- 1855年 4月26日、熊本県（鹿本郡米之嶽村字郷原）にて誕生
- 1874年 熊本医学校を卒業し、東京医学校（東京大学医学部）に入学
- 1877年 医学校を中退し、東本願寺で仏教研究
- 1877年 年末（もしくは翌年初め）に同志社英学校に入学
- 1878年 4月、京都第二公会（同志社教会）で新島襄から受洗
- 1879年 同志社に失望して中退し、以後、数年にわたって東京、大阪、熊本などで海運業、製糸業、民権運動などに従事するもことごとく挫折
- 1880年 1月、京都第二公会を脱会（信徒を返上）
- 1882年 音羽（蘇峰・蘆花の姉）と結婚（一男二女を設ける）
- 1882年 長女（落実）誕生
- 1887年 1月、尾道で回心し、一転して伝道師を目指す
- 1887年 9月、同志社（邦語神学科）に再入学
- 1889年 7月、大宮（埼玉県秩父市）で開拓伝道に着手
- 1890年 1月、新島襄から遺言を受ける
- 1893年 緑野教会（群馬県藤岡市）に赴任
- 1895年 高崎教会に赴任し、日本基督教婦人矯風会をも支援
- 1897年 10月、按手礼を受けて、正規の牧師となる
- 1902年 ハワイアン・ボードの招きでホノルルに渡り、ヌアヌ日本人教会に赴任
- 1904年 西海岸のオークランド日本人組合教会に赴任
- 1911年 北加基督教伝道団を組織し、巡回牧師となる
- 1913年 娘一家（久布白家）と一時帰国
- 1914年 5月10日、オークランドで死去